様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ７ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2014～2015
課題番号：２６８８５０９５

研究課題名（和文）プラトン哲学における政治とは何か：多数者である共同体の市民を導く方法の検討

研究課題名（英文）What is the political art in Plato's philosophy? - Consideration on the method of leading citizens in the community

研究代表者
隠岐　麻衣（須賀麻衣）（Oki, Mai）

早稲田大学・政治経済学術院・助手

研究者番号：４０７３２７１４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題は、プラトンの中期・後期の著作を考察の対象として、彼にとって「政治」とは何であり、また彼がそれを何であるべきと考えたのかを明らかにすることであった。研究成果として得られたこの問いに対する答えは、プラトンが構想した政治とは、共同体のうちで生きる全ての人が、正義を目指して善き生活を送ることができるよう、彼らの魂（内面、精神）を幼い頃から、言葉と音楽を用いて快苦の感情を教育し、さらに法律の序文を用いてそのように生きることを理性的に説得することである。

研究成果の概要（英文）：In this research project, I addressed the question what “politics” or “political art” for Plato is and what kind of “politics” he sees as the ideal one. As the achievement of this project, I reached the following point. The politics which Plato envisages consists of two elements. One element is the education. Plato tries to educate the citizens’ emotions concerning pleasure and suffer, using musical elements, namely rhythm and harmony, and words (especially story and myth). The other element of the politics is the persuasion. He attempts to persuade the citizens to live justly. The goal of the politics is that each one in the political community is able to live in a good life.

研究分野：政治学

キーワード：政治思想史　政治哲学　西洋古典学　プラトン

１．研究開始当初の背景

(1) 研究の学術的背景

プラトンの哲学についての研究は、古来より膨大な蓄積があり、その対話篇で扱われるテーマの多様性を理由として、現代のプラトン研究はさまざまな分野―哲学、倫理学、文学等―で扱われる。しかしながら、彼の中後期作品である『ポリテイア（国家）』、『ポリティコス（政治家）』、『ノモイ（法律）』が「政治的」であるという認識が共有され、多くの政治思想や政治・規範理論の教科書がプラトンを出発点とするにもかかわらず、国際的に見ても政治学の分野でのプラトン研究は極めて少ない。それでも近年では、プラトンの「政治」哲学研究は、日本国内・国外において増加しつつある（例えば、納富『プラトン』、内山『プラトン「国家」』）。

(2) 先行研究の問題と着想に至った経緯

プラトンの「政治」哲学をめぐる先行研究の大きな問題点は、「政治（タ・ポリティカ）」、「政治の技術（ポリティケー・テクネー）」という言葉が、プラトン、あるいは古代ギリシア世界においてもつ意味と、現代においてそれがもつ意味を混同している点にある。つまり、現代の人々が一般的に「政治」と捉える概念を前提としてプラトンの解釈を試みる限り、彼の「政治」哲学にとって根本的な問いである「政治とは何か」という問いに答えることはできない。それゆえ本研究では、「魂への配慮」 を、プラトンが構想する「政治」を読み解くための鍵概念として用いることとした。この読解は、主にミシェル・フーコー洞察（フーコー『自己への配慮』、『自己と他者の統治』）に多大な影響を受けたものである。

〈引用文献〉

① 納富信留『プラトン：理想国の現在』慶應義塾大学出版会、2012 年。
② 内山勝利『プラトン「国家」：逆説のユートピア』岩波書店、2013 年。
③ ミシェル・フーコー（田村俶訳）『生の歴史Ⅲ：自己への配慮』新潮社、1987 年。
④ ミシェル・フーコー（阿部崇訳）『自己と他者の統治』筑摩書房、2010 年。

２．研究の目的

本研究は、プラトンの政治哲学を、共同体の構成員である市民たちの魂―現代において精神や内面として理解される部分―へ働きかける方法という観点からの考察を通じて、プラトン哲学における「政治」の意味を解明することを目的とした。この目的達成のためには、音楽を用いた乳幼児の養育、詩と物語を通じた子供の教育、弁論術による成人市民の説得という三つの「魂の導く」の方法に着目しながら、プラトンの対話篇のなかでもとりわけ政治的な作品である『ポリテイア』と『ノモイ』の中心的考察が必要である。考察の際の仮説は、プラトンの『ポリテイア』と『ノモイ』に見出しうる「政治」が、初期対話篇に見られるような、ソクラテスの実践として描写される哲学的対話が目指す「自己の魂への配慮」を最終目標に据えているというものである。しかし他方でプラトンは、「政治」の実践においてはソクラテスが採った私的な対話という方法から離れ、多数者である市民を対象とする教育や言論の技術を模索したと考えられる。つまり、市民の間に「自己の魂への配慮」という目的を達成しようとしたのである。したがって本研究で鍵となるのは、この目的達成のための方法としての「魂の導き」という概念である。本研究ではこの概念が、ハーモニーとリズムという前言語的な音楽的要素による養育、詩や物語を用いた子供の教育、そして弁論術による成人市民の説得という 3 つの要素から構成されていることを示すことで、プラトンの「政治」を析出する。

３．研究の方法

本研究は、プラトンおよび彼と同時代の哲学者やソフィスト・弁論家、詩人、悲劇作家の古典ギリシア語のテキストの読解と解釈を主たる研究方法とした。テキスト読解に際しては、日本語、英語、ドイツ語、ラテン語の翻訳書、注釈書、二次文献を用いた。

(1) 読書会および研究会

古典ギリシア語は地方や時代、さらに著者によって語彙や文法の点で大きく差異があるため、一人の政治学研究者がそれらすべてを網羅することは困難である。したがって悲劇・喜劇の専門家や修辞学の専門家など、ギリシア世界の研究を行う他分野の人々との読書会や研究会で古典ギリシア語のテキストに取り組み、議論を行った。

(2) 成果発表と外部評価の場

本研究を通じて得られた成果は、国内・国外の学会や研究会で発表を行った（詳細は、４．研究成果を参照）。本研究課題は、これまで日本においては文学あるいは哲学の分野で、国外においては古典学の分野で研究されてきたため、外部評価の場として一方ではそれらの分野が必要であるが、他方で本研究によって開拓を試みる政治哲学の分野および政治学の分野もまた必要であった。

(3) ドイツでの研究

先述のとおり、プラトンの政治哲学の研究は国際的に見ても未だ初期の段階にあり、日本国内における研究はそれと同等か、あるいはそれ以上に未発展である。加えて、独立した学問分野としての西洋古典学が未だ存在しない日本において、古典ギリシア語の精緻な読解に基づいてプラトンの政治哲学を析出することは困難と言える。したがって本研究課題に取り組むにあたり、古典学の最も古い伝統をもつドイツへの留学は必要不可欠であった。報告者は既に 2014 年以前にドイツへの留学経験を持ち、さらにドイツ政府認定の古典ギリシア語能力試験に合格していたため、留学直後から専門的な研究に取り組んだ。なお、ドイツでの研究拠点としたのは、プラトン研究における重要な「テュービンゲン学派」を生み出した、テュービンゲン大学哲学部古典文献学科である。

４．研究成果

本研究課題全体を通じて明らかになったのは、プラトンの「政治」哲学は、現代政治学において通常研究対象となる「政治」概念よりも広い射程を持ち、またその射程を捉えるためのひとつの視点として、彼の教育にかんする議論に着目する必要があるということであった。個々の研究成果は次の通りである。

(1) 「アリストテレス『詩学』とプラトン『ポリテイア』における聴衆の情念の比較検討」〔雑誌論文①〕

本論考は、詩（とりわけ悲劇）の「正しさ」をめぐって、プラトンとアリストテレスが全く異なる見解を示す理由を探るものである。プラトンは、彼の理想的な政治体制にふさわしくないという理由で、当時賞賛されていた多くの詩や悲劇の追放を主張する。その追放理由を理解するために本論考では、詩が、それを聴く観客に良い作用を与えると考えるアリストテレスと対比した。本論考から、プラトンが危険視していたのは、詩によって観客が我を忘れ、劇中の登場人物であるという結論が得られた。

(2) Where are the Poets in Plato’s Political Philosophy?〔雑誌論文②〕

邦題は「プラトン政治哲学において詩人はどこにいるのか？」。これまでの研究において報告者は、プラトンは詩の追放を要求する一方で、良い詩は教育において有用であるとい

う結論を一貫して導いてきた。本論考は、それらの研究の中で取り残された課題、すなわち、詩が有用であるとしても詩人も有用なのかという問いに取り組むものであった。ここから得られた結論は、詩人はプラトンが理想とするポリスにおいて、市民たちが心を傾けて「神の言葉」として熱心に有用な詩を聴くようになるために、「神の言葉の翻訳者」と一般にみなされる詩人が必要であるというものであった。

(3) 「説得：プラトン政治哲学における政治的言論の技術」〔学会発表①〕
本報告では、通常、プラトンが批判し否定していると考えられる他者の「説得」が、どのようにして彼の政治制度において利用されているのかという問いに取り組んだ。『ゴルギアス』に代表されるように、初期対話篇でプラトンは、弁論家が用いるレトリックが目指す説得という行為に対して否定的な見解を示していた。しかしながら、理想的な政治体制を実現するためには、ポリスを統治する人間のみならず、ポリスの構成員＝市民に正しい生き方を語り、かつ不正な生き方を選ばないよう説得する必要がある。本報告は、これまで軽視されがちであったこの側面を明らかにした点で意義があると思われる。

(4) Persuasion in the Preamble: A Political Art of Speech in Plato's Political Philosophy〔学会発表②〕
邦題は「法律序文における「説得」：プラトン政治哲学における政治の技術」。成果(3)で明らかにしたように、プラトンは弁論術の目的である「説得」を、自身の政治の技術にも取り入れようとしていた。本報告は、具体的に「説得」を目的とする言論はどのようにしてプラトン政治哲学において用いられるのかという問いに取り組むものであった。ここで注目したのは、『ノモイ』に登場する「法律序文」である。序文は、市民の魂を徳へと導くための動機づけとして機能する。詩が教育で用いられるがゆえに子供を対象としていたのにたいして、法律序文は言論を十分に理解できるようになった大人の市民に用いられるということが、本報告から明らかになった。

(5) Zur Analogie zwischen Polis und Seele im zweiten und dritten Buch in Platons Politeia〔学会発表③〕
邦題は「プラトン『ポリテイア』第二、三巻におけるポリスと魂のアナロジーについて」。プラトンは『ポリテイア』において理想的な政治体制についての議論を導入する際に、「ポリスと魂のアナロジー」と呼ばれる比喩を用いる。これは、ポリスの構成（どのような市民からなるか）と魂の構造（どのような部分が存在するか）を同列に考えることができるというものであり、このアナロジーを端緒として彼の「政治」哲学が始まる。しかし、なぜポリスの構成と魂の構造を同じ平面上で語ることができるのかについて、プラトンは詳細を語らない。本報告が目指したのは、これら二つをアナロジーとして説明できる理由を、必ずしもアナロジーを論じていない箇所にも目を配ることによって示すことであった。

(6) Kommentar zur 475c-480a und 523a-525a in Politeia〔学会発表④〕
邦題は「プラトン『ポリテイア』475c-480a と 523a-525a への注釈」。本報告の目的は、『ポリテイア』における存在論的議論と、いわゆる「哲人王支配」との関係を、古典ギリシア語のテキストに基づいて忠実に理解することであった。プラトンによれば、最善の政治体制は哲人王（哲学者が王となるか、王が哲学者となる）による統治体制である。本報告は、哲人王に要求される知識のあり方に複数

の側面があることを明らかにした。すなわち、哲人王が持つべきは知性であり意見ではないこと、その対象は存在であり、生々流転するものではないことなどがその特徴である。

(7) Die Physis der Philosophen und die der Nicht-Philosophen〔学会発表⑤〕
邦題は「哲学者の自然本性（ピュシス）と非哲学者の自然本性について」。成果(6)で明らかにしたように、プラトンの政治哲学において「哲学者」は特別な位置を占めている。本報告で課題としたのは、そうした哲学者に「生まれつき備わっている性質・性格」、すなわち「自然本性（ピュシス）」と呼ばれるものと、哲学者以外の人間のそれの間に存するとされる相違は何に由来するのかという問いである。結論として得られたのは、プラトンは神話を用いて、両者の間には生まれつきの相違があることを示しながら、自身の教育論を展開する際には、両者の間に存する生まれつきの差は非常に小さいか、あるいは教育でいかようにも作り上げることができると考えているということであった。これによって、時折見られる優生主義としてのプラトン像は誤っていることも明らかになった。なお、本報告の発展ヴァージョンは、2016 年 4 月 16 日に第 8 回 Tuebinger Platon Tage: Platon und die Physis（テュービンゲン・プラトン学会：プラトンとピュシス）で招待公演として発表された。招待公演のテキストは、2016 年末に刊行予定の Platon und die Physis（プラトンとピュシス）という書籍への収録が決定している。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　2　件）

① 隠岐（須賀）麻衣「アリストテレス『詩学』とプラトン『ポリテイア』における聴衆の情念の比較検討」、『西洋古典研究論集』（2014 年、西洋古典研究会）。

② Oki-Suga, Mai. Where are the Poets in Plato's Political Philosophy? （プラトン政治哲学において詩人はどこにいるのか？） In An Anthology of Philosophical Studies, vol. 9. 2015, Athens Institution for Education and Research（教育と研究のためのアテネ研究所）、査読有。

〔学会発表〕（計　5　件）

① 隠岐（須賀）麻衣「説得：プラトン政治哲学における政治的言論の技術」2014 年 10 月 12 日、日本政治学会 2014 年度研究大会（於早稲田大学）、査読有。

② Oki-Suga, Mai. Persuasion in the Preamble: A Political Art of Speech in Plato's Political Philosophy （法律序文における「説得」：プラトン政治哲学における政治の技術）. 2014 年 11 月 30 日、第 28 回政治哲学研究会（於早稲田大学）。

③ Oki-Suga, Mai. Zur Analogie zwischen Polis und Seele im zweiten und dritten Buch in Platons Politeia（プラトン『ポリテイア』第二、三巻におけるポリスと魂のアナロジーについて）. 2015 年 7 月 17 日、Graezistisches Forschungs-colloquium in der Universitaet Tübingne（ドイツ・テュービンゲン大学、古代ギリシア学研究コロキウム）.

④ Oki-Suga, Mai. Kommentar zur 475c-480a und 523a-525a in Politeia（プラトン『ポリテイア』475c-480a と 523a-525a への注釈）. 2015 年 7 月 29 日、12. Treffen des Arbeitskreises Logos Tübingen Messina（第 12 回、「ロゴス」ワークショップ、テュービンゲン＝メッシーナ）.

⑤ Oki-Suga, Mai. Die Physis der Philosophen und die der Nicht-Philosophen （哲学者の自然本性と非哲学者の自然本性について）. 2016 年 2 月 12 日、Graezistisches Forschungs-

colloquium in der Universitaet Tübingne（ドイツ・テュービンゲン大学、古代ギリシア学研究コロキウム）.

〔その他〕
ホームページ等
http://researchmap.jp/maios/

６．研究組織
(1)研究代表者
隠岐 麻衣（OKI, Mai）
早稲田大学政治経済学術院・助手
研究者番号：40732714

(2)研究分担者
該当者なし

(3)連携研究者
該当者なし